

数と数え方の世界誌

中国

中国における数と数え方

横 田 高 明

1. 「1」の読み方と使い方

中国では、数字の「1」をyīと読む場合とyāoと読む場合がある。普通は3桁以上の番号を粒読みにするときにyāoを用い、位数をつけて読む場合はyīと発音するのが一般的である。例えばバス路線の313路（313系統）はsān yāo sānと読むが、13路はshí sān lù、1路はyī lùでyāoを用いることはない。しかし、電話のダイヤルだけは先抜1（先ず1を回す）のような場合は、1桁であるがyāoと発音することができる。

また1995年のように3桁以上の年号を言う場合は、yī jiǔ jiǔ wǔ niánのように数字を粒読みする。年号は番号と性格が違うので、1があっても決してyāoと読むことはない。小数点以下の数字も番号ではないので、1をyāoと発音することはない。

さらに日本語では百以上の場合、100とか1000では百、千と発音して一を省略できるが、中国語では一百yībǎi、一千yīqiānといい省略することはない。ついでにいえば、101の発音は一百零一yībǎi líng yīと言い、110は一百一十yībǎi yīshíまたは一百一yībǎi yīと省略することがある。1001は一千零一、1010は一千零一十、1100は一千一百または一千一ということもある。

2. 数の大小の表し方

1 から 9 ぐらいまでの数を予想して使うときは、几jǐが用いられる。你

几歳？ Nǐ jǐ suì? (あなたはいくつですか?) は、まだ10才にならない子供に年を聞く場合であり、有几个人？ Yǒu jǐ ge rén? (何人いますか?) は10人以内の人間を想定したうえの質問である。

一方、一些人 Yìxiē rén は全体に対して「一部の人」という相対的な数量を表している。したがって1万人の労働者が働く工場で「一些人」と言えば、500人でも1000人でも2000人でも表すことができる。いわば全体の大小とは無関係に用いられる。また、几个は具体的なものにしか使用しないが、一些は抽象的なものや形容詞とともに用いられることもある。一些鼓励 yìxiē gǔlì (いくらかの励まし)、高一些 gāo yìxiē (少し背が高い) はこの例である。

3. 量詞の使い方

何を数えるかによって量詞が違ってくるので、それは覚えておく必要がある。動物を数えるとき、馬は一匹马 yì pǐ mǎ、牛は一頭牛 yì tóu niú、ブタは一口猪 yì kǒu zhū、ヒツジ是一只羊 yì zhī yáng、鳥是一只鳥 yì zhī niǎo と言うのが一般的であるが、牛是一条牛 yì tiáo niú、ブタは一頭猪、鳥是一个鳥ともいうことがある。

他によく使われるものとしては、一碗飯 yì wǎn fàn (御飯一膳)、一輛汽車 yì liàng qì chē (車一台)、三瓶酒 sān píng jiǔ (お酒三本)、這本書 zhè běn shū (この本)、一个人 yì ge rén (ひとり)、一朵花 yì duǒ huā (花一輪)、两件衣服 liǎng jiàn yīfu (服二着)、五条魚 wǔ tiáo yú (魚五匹)、那張桌子 nà zhāng zhuōzi (あのテーブル) などがある。

さまざまな描写を含む量詞には、一輪明月 yì lún míngyuè (一輪の明月)、一縷幽香 yì lǚ yōuxiāng (漂いくるほのかな香り) などがあり、一条路 yì tiáo lù (一本の路) には、条に細長く延びる路のようすが込められている。

(注) 呂淑湘主編『現代漢語八百詞』、大修館書店『中国語入門 Q & A』などを

参照した。

東南アジア

数にまつわる奇しな話

桐 生 稔

東南アジアでも、数にまつわる逸話が多い。ミャンマーでは、9 という数字はこのうえなく不幸をもたらす数である。バスや乗合トラックで、運転手を含めて合計9人になると、人に替わる石でも、丸太でも何かひとつ乗せて走る。9を忌み嫌う理由はさだかでないが、一説には9は生命の終りを意味するからという。ところが、隣のタイでは、9はラッキーナンバーとなる。3の倍数は常にラッキーナンバーで、とくに9は“金が入る”という意味になる。どういう説か、タイの宝くじの一等当選番号には必ず9が絡んでくるといふ迷信があり、9が含まれる宝くじは飛ぶように売れる。

“割切れぬ数”

インド亜大陸諸国やミャンマーでは、古くから通貨単位としてアンナという単位を用いている。これは、インドの場合1ルピー（現在価値で約3円）は、現在100パイサと定められているが、アンナの単位は1を16等分したものであるため、1アンナはほぼ $6 \cdot 4$ パイサに匹敵する。このため、古くからのアンナを使うとき、 $6 \cdot 4$ の4倍が25パイサとなりこれを4アンナ、また50パイサの場合は8アンナと云う習慣が今でも残っている。

ただし、インド亜大陸諸国やミャンマーも東南アジア諸国と同様、近年の経済発展はめざましく、それにつれて、物価が上昇し、パイサ（インド、

バングラ、パキスタン）やピア（ミャンマー）を使う場面はだんだん少なくなってきた。バングラデシュの乞食協会（Beggar's Association）では、数年前にパイサの受取りを拒否する声明を発表した。

“奇妙な通貨”

ミャンマーは、1988年の民主化運動によって崩壊するまで、26年間にわたって「ビルマ式社会主義」体制下にあった。この体制下では、長期にわたる深刻な経済停滞と、闇市や密輸が横行する異常な経済状態が続いた。そんななかで、国内のブラック・マネーを吸い上げるためと偽札対策として、ある日突然流通貨幣を廃止（Demonetisation）するような乱暴な政策を実施したこともある。この廃貨措置に怒った国民が88年の民主化騒動のひとつのエネルギーになった。さてその後政権を取った軍政（SLORC）は、次々に新紙幣を発行した。

しかし、その単位は1チャット、5チャット、15チャット、までは解るが、その次が、35チャット、45チャット、75チャット、90チャットとまことに奇妙な数字が並ぶ。この紙幣が流通している頃（1992年に廃貨となった）手持ちの紙幣で100チャットをつくるのに苦勞している人が多かった。何故このような単位を使ったのか、はっきりとした政府の説明がなかったので、いろいろな噂が流れた。そのなかには、「国民の計算能力を高めるために効果がある」というものや、「少額紙幣だけを多種類発行することは偽札防止になるためだ」などがあった。いまでもその真の意図は解らない。

それでも今日、市場経済化と対外開放の進展でミャンマーは急速に変わりつつあり、現在では高額紙幣の500チャット（公定で約1万円、実勢で500円）が氾濫している。

—— パプア・ニューギニア ——

パプア・ニューギニアの数

畑 中 幸 子

オーストラリア行政から独立したパプア・ニューギニアは部族社会で住民の大部分が高地・内陸部に住み、根栽農耕に従事していた。パプア・ニューギニアは他のメラネシア社会同様、無文字社会であった。このような社会にあって人びとは日常生活でどのようなときに数が必要になり、どのように数えていたのか、彼ら独特の数量表示について紹介したい。

部族社会の文化は共通していても言葉となると別で、パプア・ニューギニアでも相互に理解が不可能な言語は大まかに整理しても300余りに上る。数の呼び方もちがえば、数え方もちがうのは言うまでもない。筆者がフィールドワークに入っていた中部高地のタバレ族をふりかえてみた。タバレ族は二つの基本的な数をもつ。“one” (teran) と“two” (su) である。他の数はこれらの二つの数の組合わせである。不定代名詞 “any” (ta) と指定代名詞 “this” (i) がこの組合わせに加わる。

1 teran

2 su

3 suta

4 sui sui

5 sui sui tai

6 sui sui sui

7 sui sui sui tai

8 sui sui sui sui

9 sui sui sui sui tai

10 sui sui sui sui sui あるいは ogene kole kole (兩手指を意味する)

- 11 ogene kole kole kalne teran (両手指+足の親指1つ)
- 12 ogene kole kole kalne su
- 13 ogene kole kole kalne suta
- 14 ogene kole kole kalne sui sui
- 15 ogene kole kole kalne kolulu
- 16 ogene kole kole kalne kole muru kole teran ta
- 17 ogene kole kole kalne kole muru kole suone
- 18 ogene kole kole kalne kole muru kole suta
- 19 ogene kole kole kalne kole muru kole sui sui
- 20 ogene kole kole kalne kole kole

日常生活では右手の小指から順に曲げて数え、10までで事はすまされている。数が入る会話になると、外来者にとっては大変である。例えば16頭のブタがくる（あるいはこちらへよこせ）というにはBona（豚）ogene kole kole kalne kole muru kole teran ta u nalnaと簡単な話も長くなる。高知人たちは早口で、聞きなれるまで言葉をとらえるには容易ではない。特に数が入ると余計に早くしゃべられるような気がする。

部族社会での交易や交換には目分量や彼ら独特の数量表示がある。伝統的な貨幣である貝貨は子安貝が樹皮をさいた紐のようなものに一列に縫いつけられており、その紐の長さで価値があらわされる。その単位の表示に身体が利用される。屢々用いられるいくつかの例を挙げるならば、先ず両腕を左右に伸ばした長さマイセ(maise)で、これは戦前まで我々もよく使っていた一尋^{ひとひろ}にあたる。ロープをはかるのに使われる。首から伸ばした片腕の手先までをイネラウ(inerau)、同じく肩から手先までイネレイ(inerei)、肘から手先まではパスネ(pasane)で貝貨の取引によく使用される。脚も膝から下のワリアタ(wariata)と腰から膝までのワリニ(warini)が使われる。

部族社会が貨幣経済と接触するや銅貨が流れた。人びとはこの銅貨を商業的価値としてではなく、伝統的財貨と同様に扱った。細い竹の一節を使い、その中へ銅貨を入れ一杯になったものを一単位とし、交換に使用された。換金作物が導入されて現金収入を手にするようになって、初めて人びとは紙幣の価値を認めるようになった。

パプア・ニューギニア社会ではまだ完全な貨幣経済とはいえない。地方では自給経済と貨幣経済の二重構造の経済である。教育が進むと数の概念が先ず出てき、次に時間の概念が出てくる。その過渡期で、部族社会の人びととの取引きに戸惑わされることが屡々ある。それは彼らの財貨と近代社会の貨幣とは等価値にはならず、貨幣が非常に低くみられることである。つまり数の概念が入ってこないからである。外から入ってきた100という数は、彼らにとって計り知れないほど大きな数として扱われているのに驚かされた。ピジン英語でニュースを聞いている高地人の長老に「白人たちは戦争をよくやり、しかも長い間戦っているが、ヒトは100人も死んだかね？」と真顔で聞かれたことが思い出される。

イギリス

英国における数の話

山 田 伸 明

英国滞在中に数に関して記憶に残っていることを羅列してみよう。第一に記憶に残っていることは、間違い電話をかけてきた人が、間違い電話だと言っても、電話番号を聞いてきたことである。これは、英国では、電話を受けたほうが、最初に自分の電話番号を言う習慣があるためであろう。その習慣に慣れていない私は自分の電話番号を言わなかったのである。第

二に、ブライトンの町を歩いているときに、a pennyと言って声をかけられたことがたびたびあった。これは、もちろん、お金をめぐんでくれという意味だ。私はしかたなく、声をかけられるたびにポケットにあった小銭をやったことを覚えている。第三に銀行に行った時の思い出を二つあげる。その一つは、円をポンドに両替しに行った時のことである。両替してもらった後、いつもより金額が少ないことに気付き、もらった明細書を見てみたら計算が間違っていた。すぐ、申し出て、差額をもらったからいいものの、これから注意しなければならないと思った。日本の銀行ではありえないことだ。もう一つは帰国直前のことだ。日本に帰る前に、貯金を解約しようと思って、近くのロイズ銀行へ行った時、貯金額を算用数字ではなく、綴字で書けと言われた。総額、日本円に直して二百万円以上あったと思うが、綴字を間違えたら、お金をもらえないのではないかとドキドキした。それに、奥で誰がこんなに引き出すのかと上役がいったのか、私に應對していた行員のJapaneseという声が聞こえた。すると、数人の行員が私の方をジロジロ見たので余計緊張した。その他気付いたのは、学生のノートを覗いてみたら、12/3/'86ようになっていたことだ。アメリカ英語ならば、March 12, '86になるところだが。このことは、前から知っていたがやはりそうかと思った。

さて、アメリカ英語とイギリス英語の違いの話しになったので、この点について少し述べる。イギリス英語の場合、電話番号で二つ同じ数字が並んだ場合、同じ数字を二度読まず、ダブルという。例えば、00はダブルオーと読む。数字一般に関しては、hundredの次に必ずandを入れる。例えば、121はone hundred and twenty-oneと読む。アメリカ英語ではandは入れない。

次に、billionの話しに移ろう。現在では、英米共通でone billionは十億のことである。イギリス英語では、元は、一兆を意味したが、イギリスから出版されている辞書を見ても、この意味はold useであると書かれてい

る。しかし、現在のところ最も権威のある文法書である、Quirk他著の *A Comprehensive Grammar of English Language* (1985) をみると、現在、この単語の意味の曖昧性を知らない一般人は、アメリカ英語と同じ意味で用いているが、科学者・エンジニア・数学者はbillionを使うのを避けている。そして、one thousand millionと言っているとしている。trillion (10^{12} or 10^{18}) やquadrillion (10^{15} or 10^{24}) も括弧内に示したように曖昧であるから科学者などは使用を避けているという。

さて、重量の単位の話に移ろう。パブでビールを注文する時に、pintとかhalf pintと言って注文するが、イギリスとアメリカではその重量が異なる。アメリカでは16オンスのことだが、イギリスでは20オンスのことである。アメリカの1パイントはイギリスでは0.8327パイントである。このような尺貫法に慣れていないのでメートル法で言うと、1パイントはアメリカでは0.473リットルでありイギリスでは0.568リットルである。従って、1パイントのビールを注文する場合はイギリスの方が得ようである。もちろんアメリカではピッチャーと言って注文するであろうが。細かい数字の話になると、数学の弱い私は、頭がパニック状態になるので、ガロンなど、その他にも英国と米国では違いがあるが、これくらいにして、重量の相違の話はやめることにする。

ところで、最近イギリスはメートル法を採用することにしたという報道がされた。これは、国際化の影響であろう。また、ますますアメリカ英語がその国力のため力を強めてきている。このような、状況のなか、かつての、覇権国であるGreat Britainの標準英語はどれだけイギリス英語特有の表現法と意味を維持していくことができるのであろう。はっきりしたことはわからないが、日本でも、お酒は一升何合とかタタミに関しては量という表現が残っているように、民衆の生活に深いかかわりのあるものは、イギリス特有の表現が保持されるであろう。従って、ビールを注文する時のパイントは今後も使いつづけられる有力候補と言ってよい。

カトルカール

西 川 祐 子

初級フランス語の視聴覚教材の中に公園のマロニエの樹の下で、11人のこどもに100までの数をかぞえさせる場面があった。10づつ数えさせているのだが、最初のこどもは、まだ5までしか数を知らないので、次の子にもういちどやりなおしてもらっている。そこで11人のこどもの登場となる。年齢いろいろ、表情さまざまなこどもたちが一生懸命の様子がおもしろい。

フランス語では、70を、60と10という言い方で数える。71は60と11である。ずっと足し算で数えるのかとおもうと、途中から掛け算もはいて、80はカトル・ヴァンつまり20が4つつという。81は20が4つつ、それに1というわけで、掛け算と足し算になる。計算など知らない幼いこどもは数を暗記しているだけだから、すらすら数えるが、少し大きな子供は途中で頭の中についつい足し算、掛け算がうかぶことがあるようで、かえってつまりきそうになる。

フランスで生活すると、買い物のお釣りがなかなかでてこないのでいらいらする。お釣りの計算は引き算ではなくて、足し算です。25フランの買い物に100フラン札をだすと、品物の上にまず1フラン銅貨5個、次に10フラン2個、それから50フラン札を並べて、お客の出した100フラン札と等価になることをお互いたしかめた上で交換、という手順である。だいたい暗算をしない。青空市場の八百屋さんで5種類くらいの品物を買うと、もう紙に書いて顔をしかめながらの計算である。それに日本ほど電卓がゆきわたっていないようだ。

しばしば、ひどいめにあうのは郵便局で切手を買うときである。フランスの記念切手はなかなかデザインがよく、色もきれいなので、つい幾種類

も買いたくなる。あれを何枚、これを何枚ととりだしてもらって、さて計算に時間がかかる。私の後ろに待つ客の行列ができてはらはらする。

日常の計算は苦手らしいのに、フランス人はふしぎに数字が大好き。T. G. V. と新幹線の時速をくらべる。東京タワーとエッフェル塔はどちらが高いか。名古屋市の人口は？春日井市は人口流入と流出とどちらが大きいかといった質問をこのむ。ガウスなど、数学者を輩出する社会でもある。算術と数学はちがうのかな。

最後に数字が名前になっているお菓子の紹介。カトルカール。カールは4分の1のことだから、4分の1を4倍すると1になるという名前のお菓子である。つまり、卵、砂糖、バター、小麦粉の4種類の材料を等量つかう。卵を基準にすると便利。卵ひとつの重さは60から70グラムだから、3個で約200グラム。バター1箱分である。砂糖は小さめのカップ一杯くらいになる。

卵を黄みと白みにわけて、白みをかよくよく泡たてるのがこつである。ふくらし粉はいれない。卵の黄みとバターと小麦粉を混ぜたものに泡立てた白みを加えて、バターをぬったケーキの型にいれる。香料もいれないから味がいいのである。香りをつけたかったら、オレンジピールかレモンピールを細く刻んでケーキ型の底にちらばしておくといよい。オーブンは160度にして1時間、焦げ色をみてさらに10分か20分を足してできあがり。かんたんな計算問題のような作り方のお菓子である。

イタリア

日常生活のなかの数学

小 川 熙

イタリア語の数詞そのものはフランス語のような複雑さはなく、1から

20までを個別に覚える必要があるが、あとは極めて規則的で、英語のやり方と似ているといえる。イタリアで体験した「数え方」に関して、以下にいくつかのエピソードを記してみたい。

〈1〉 イタリアの通貨リラは何しろ金額が大きいことで有名である。100リラ=7.00円ぐらいだから、何十万、何百万という数字のやりとりが日常茶飯事として行なわれる。そこで街で何かを買って「いくら？」ときくと、たとえば「30」という答が返ってくるが、これは30,000リラ（約2,000円）のことなのであって、このように口頭の場合には下の3桁のゼロを省略してしまうことが多い。民間の次元で勝手にデノミをやっているわけである。

〈2〉 イタリアの度量衡はメートル法だが、むしろその種の単位の使い方に特徴があるかもしれない。たとえばettoというのは、hecto（百）に由来するettogramma（100グラム）の略であるが、肉、野菜、穀類など重量で価格がきめられる商品の販売はすべてettoを単位にするのが普通である。「生ハムを3 etti（ettoの複数。つまり300グラム）ください。」というぐあいに使われるわけである。これは多分ヨーロッパの他の国でも行われていることだろう。日常生活での重量単位としてはキログラムは必要ないし、グラムでは小さ過ぎるから、非常に合理的といえることができる。また、市民生活にはあまり関わりがないが、事業者の間ではquintale（100トン）という単位がよく使われる。トンtonnellataというのもあるのだが、たとえばトラック輸送などの場合、1.8tというよりは18qという呼びの方が好まれるようである。（小数点を用いると1.8は3語となるが、18ならば1語である。）

もう一つ単位に関することだが、高速道路などを走っていると「Roma 143 k」（ローマまで143キロ）などと標識が出てくる。イタリア語では外来語を除いてkは存在しないので、最初はオヤッと思った。なぜならキロメートルはchilometroと書かれるからで、なぜchの代りにkが採用された

のかわからない。おそらく国際化の時代になって、KO（ノックアウト）やkarate, karaokeなども使われているし、陸続きのヨーロッパにあって高速道路は国際的な性格をもつから、そうした時代の反映なのだろうか。

〈3〉 25年ほど前、こまかいことは忘れたが、イタリアのどこかのオフィスか何かで、書類に10.07.1970と日付を書いて差し出したら、対応した若い女性が途端に指折り数え始め、「7月」に当たるところをlug.と書き直した。これはおもしろい経験だった。なぜなら、英語をはじめとするヨーロッパ語では各月が固有の名称をもっているから、この女性はluglioが何番目の月であるかわからなかったのである。（もっとも9月から12月までの呼称は数に関係があるわけだが、そういう語源は忘れられているにちがいない。）考えてみれば、日本ももともと「睦月」にはじまる固有の呼称があったのだが、近代になって数で呼ぶ方式を取り入れたことは大英断だったといえる。先ごろイタリアとフランスを旅行したが、いまではレシートなどに「月」に当る部分が数字で打たれており、少なくともビジネスの世界ではかなり数値化が進んだようである。

〈4〉 penultimoという単語がある（スペイン語も同じ）。pene（<ラテン語paeneほとんどの意）+ultimo（最後の）で「終りから二番目」を意味する。伊英、伊仏の辞典でこの語を引くと、last but one, avant dernierとなっており、1語でこの意を表すのはおもしろい。ある町を車で走っていて、通行人に道をきいたら、この語を使って「突き当りの一つ前の道を右に曲れ」といわれた。ところがこの道は一方通行であり、突き当たりまで行ったら後に戻ることができないのだ。車とは不便なものではないか！

ラッキーセブン

— アメリカにおける数にまつわる話 —

吉 川 寛

アメリカとイギリスとの間の数の読み方、位取り、度量衡などの違いはイギリスの所で述べられているので、ここでは重複を避け、私のアメリカ滞在中の数にまつわる体験のいくつかを紹介することにしたい。

イギリスでは街角で小錢をせびるのにpennyを用いるようであるが、アメリカではpenny（1セント硬貨）では少な過ぎるのか、nickel（5セント硬貨）或いはdime（10セント硬貨）をくれとよく言われる。断ればそれまでであるが、ある時、dimeをくれと言われて面白半分にquarter（25セント硬貨）しかないと答えたら、相手もめげず、つりを出すからと言われた。思わず笑い出しそうになったのを覚えている。

お金に関連する話としてよく知られているには、買い物の時の釣り銭の出し方であろう。アメリカもイギリス、ドイツ、フランスなどと同じように、価格に釣り銭を加算して行き、払った金額と等価になるまで続けるという方式である。これは、トラブルを避けるため故意に確実な方法をとるのか、計算が苦手なので、日本式に引き算で瞬時に釣り銭を出すことができないのが理由はよくわからない。しかし、計算が遅かったり、暗算が苦手なアメリカ人によくでくわす。私もそのような経験をよくした。ある日、銀行員として働きながら大学院生でもある年上の友人とボーリングをした時の事である。銀行員であり出納係もしているというので彼に点数の計算をまかせた。しかし、せいぜい3桁の足し算であるのに誠に遅く、時間がかかって仕方がない。しまいには筆算までやりだした。そこで私が代って暗算で点数を付けることになった。私は、そろばん塾に通ったこともない

し、日本人として特に計算が速い訳ではないが、彼は目を丸くして驚いていた。少なからずいい気分であったのを記憶している。

アメリカ的な数感覚として有名なのは“lucky seven”である。その語源については諸説あるが、その一つに、アメリカの大リーガーの野球の試合で、何故か7回によく点が入るので“lucky 7”と言う語句が生まれたと言うのがある。真偽の程はよく分らないが、アメリカ人の多くが7と言う数を好むのは本当である。これに関する私の経験を一つ紹介しよう。私が下宿していたアメリカ人家庭の隣の家は、夫がかなり以前に職をリタイヤした老夫婦が暮していた。その70才位の老紳士は、毎日のように自宅でガレージセールなどをしながらのんびりと暮していた。私は大学の行き帰りに立ち寄って世間話などをよくしたのだが、彼の車のナンバープレートの番号はいつも“7777”であった。「いつも」というのは、私の滞在していた州では、毎年色違いのナンバープレートを新しく買うことになっていて、それが車にかけられた州税の支払い証明にもなっていた。年が明けて1月半ばの期限を過ぎても旧年の色のナンバープレートを付けていると警察に税金未納で検挙されるという仕組みになっていた。この時、同じ番号のナンバープレートにしたければ、旧年の11月半ばまでにその旨を希望し、お金の支払いをすることになっていた。隣のおじさんはいつも早々に手続きを済ませ、毎年色違いではあるが同じ“7777”のプレートを自慢げに付けていた。私はと言えば、いつも期限ぎりぎりに新しいナンバープレートを買っていたので、私のポンコツのシボレーのプレート番号は毎年異なっていた。

アラブの数とかぞえ方

堀 内 勝

現代我々が用いている数字はアラビア数字と言っているし、ゼロの（発明はインド）応用、及びそれに基づく代数字、幾何学、天文学を発達させ、世界の自然科学の分野に多大な貢献をしたアラブ世界ではある。が、「数」の実生活にかかわる分野では、きわめて厄介な問題を沢山かかえて今日に至っている。何〈冊〉の本をとという助数詞の問題はないにせよ、例えば「8冊の本」という場合「8の本」でいいわけだが「本」の性が男性ならば数の「8」は逆の女性を用いねばならず、また「本」は複数の対格にせねばならないと言った性と数、格がこうるさくつきまとう。性の一致は1、2のみで、その他の数詞は連接する名詞の性と反対の数字表現せねばならない。また名詞も11以上は単数表現でよく、属格にして、100以上は対格にするという複雑多岐にわたる。数に関してはいずれの言語修得においても、早い時期に済ませ役立てようとするのに、ことアラビア語に関しては、初級においては末期に配される、という変則ぶりである。

また「数」の音節も、他の言語は普通は一・二音節、多くても三音節と短かくして、また表現しやすいうになっている。これに対して稿末のかぞえ歌の原文を見れば分るように、アラビア語ではワーヒド(1)、イトネーニ(2)、タラータ(3)、アルバア(4)と語自体も音節数が多く、表現がなめらかと言うわけにはいかない。エジプトのカイロである小学校を訪れた折、グランドで歩行訓練を行ったのを観察した時の体験。イチニ、イチニと声をかける、この同じやり方がワーヒド・イトネーニ、ワーヒド・イトネーニとなる。これを二足の歩行と合わせてやるのだから歩きの方が極めて遅くなり、速めようすると、ワーヒド・イトネーニををすばやく

無理強いをした口調でせねばならない。見ていると右左右左と歩行する二完歩目を抜いて号令せず、三完歩目、五完歩目をワーヒド・イトネーニを早口で号令して歩行を合わす算段を行っていた。他に「数」を表わす方法としてアラビア語アルファベットも数値を持っており、最初の文字アリフは1を、次文字バーが2を表わすことから、イチ・ニをアリフ・バーとやったらワーヒド・イトネーニより余程〈間尺^{ましゃく}〉に合うのではないかと指導の先生に提したが「成る程ね」と言ったきりであった。

さて数のかぞえ方であるが、アラブ世界には二種数ある。もっとも広くまた古くからあるかぞえ方は片手（通常は左手）のみを使い、右手は添える時もある。1～5までは開いた指を、小指から順次折って (thanā) ゆく。そして6～10までは、同じく小指から開いてゆく。もう一つのかぞえ方はわりに新しいもので、片手、(同じく通常左手)で握り拳を作り、親指から順次開いてゆき5まで表わす。6以上必要な時はもう片方の手を出して同じ指の仕草を続ける。

これに関連して、数え歌を一つ紹介しておこう。これは幼児に数を教え込むのに容易なように節をつけて歌われる。また憶えやすいように韻も踏まれている。

wāhidun huwa rabbī
ithnāni bābā wa-'ummī
thalāthatun huwa 'axwātī
arba'atun huwa 'aṣḥābī
xamsatun 'asābi'u yaddī

一つは それは彼アッラー
二つは それはパパとママ
三つは それは兄弟姉妹達

四つは それは私の友達

五つは それは私の手の指ね

東アフリカ

諸民族言語の数の数え方

吉 田 昌 夫

東アフリカという場合、ここではケニア、ウガンダ、タンザニアの3か国を指す。この地域では、バントゥー (Bantu) と呼ばれる、文法や単語に共通性の多い言語を持つ民族グループが住民の大多数を占める。東アフリカの共通語 (リンガ・フランカ) とされているスワヒリ語は、このバントゥーの諸言語を話す人々がインド洋沿岸地帯で、アラビア語を話すアラブ系商人と接触し、通商の必要上、あるいは結婚の結果として家庭内での会話の必要上、アラビア語の語彙を取り入れて形成してきた言語であるといわれる。このようにして生まれたスワヒリ語は、基本的にはバントゥー諸語の文法上の特徴を持つが、アラビア語を起源とする単語が実に多い。東アフリカ内陸には、この他に言語的には全く異なるナイロティックと呼ばれる人々がおり、有名なマサイ人やケニアで3番目に大きい民族のルオ人などは、このナイロティックに属する。

ケニアで人数の上では第一の民族ギクユと第4の民族カンバ、ウガンダで第一の民族ガンダと第2のソガの各民族の数の数え方を調べ、これをスワヒリ語の数の数え方と対比させたのが次に掲げる表である。参考までに、スワヒリ語と対比させる意味でアラビア語、全く関係を持たない言語の例としてマサイ語の数え方も掲げてある。

第一列のカンバ語と第2列のギクユ語は大変似かよっており、7の数え

方が少し違うだけといってもよい。第3列のガンダ語、第4列のソガ語をこれと比べて見ると、7と8の呼び方が違うことが判る。ソガ語の1の呼び方も異なっている。大きい数の20から100までの呼び方は、ガンダ語とソガ語は大変簡単である。しかしともかくもバントゥー諸語の数の単語は大体において似かよっている。

次に第5列のスワヒリ語を見てみよう。1から5までは、バントゥーの数の呼び方をそのまま使っており、8と10もバントゥーのものである。しかし、6、7、と9は、アラビア語からの借用である。実はこの3つについても、古いスワヒリ語ではバントゥー式の呼び方を使っていた（表の括弧内の呼び方）。現在では古い呼び方はまず聞くことはないが、故和崎洋一教授は、この6、7、9についてはスワヒリ語への「乗り換え」であるとし、「なぜこの数だけ乗り換えが起ったのか、問題としておく」と述べている。^注

スワヒリ語の20から100までの基幹数字は全部アラビア語から取ったものであるが、このような大きな数を呼ぶ1つの単語は最初スワヒリ語にはなく、20を「2つの10」、30を「3つの10」という方法で呼んでいた。しかしこの古い呼び方は現在完全に消滅しており、最初から独自の呼び方は存在しなかった1000と共に、今は完全にアラビア語風になっている。なお10万を指すスワヒリ語のラキはヒンドゥー語から、100万のミリオニと10億のビリオニは英語からの借用である。

数を遠くにいる人に伝える方法には、どんなものがあるだろうか。マサイ人は手話のように手で数を伝える習慣があるが、あまりよく教えてもらえなかった。より詳しく教わる機会があった時に発表することにしたい。

注 和崎洋一「スワヒリ化」——異文化（特にアラブ文化）に対するバントゥーの対応について、『アフリカ研究』第35号、1989年12月、79ページ。

	カンバ語	ギクユ語	ガンダ語	ソガ語	スワヒリ語	アラビア語	マサイ語
1	ímwe	ímwe	emu	ndala	moja	wā hid	nabo
2	ilí	igírí	bbiri	ibiri	mbili	' itn è n	are
3	itatū	ithatū	ssatu	isatu	tatu	talā ta	uni
4	inya.	inya	nnya	ina	nne	arb'á	ongwan
5	itano	ithano	taano	itanu	tano	khamsa	imiet
6	thanthatū	ithathatū	mukaaga	mukaaga	sita (tandatu)	sitta	ile
7	mūonza	mūgwanja	musanvu	musanvu	saba (fungati)	sab'a	napishana
8	nyanya	inyanya	munaana	munana	nane	tamā nya	isiet
9	kenda	kenda	mwenda	mwenda	tisa (kenda)	tis'a	naudo
10	íkumí	ikūmi	kumi	ikumi	kumi	'ashara	tomon
11	íkumí na ímwe	ikūmi-na-ímwe	kumi n' emu		kimi na moja	hidā shar	
12	íkumí na ilí	ikūmi-na-igírí	kumi n' abbiri		kumi na mbili	itnā shar	
13	íkumí na itatū	ikūmi-na-ithatū	kumi n' assatu		kumi na tatu	talatt ā shar	
14	íkumí na inya	ikūmi-na-inya	kumi n' annya		kumi na nne	arb'at ā shar	
15	íkumí na itano	ikūmi-na-itano	kumi n' ataano		kumi na tano	khamastā shar	
16	íkumí na thanthātū	ikūmi-na-ithathatū	kumi n' amukaaga		kumi na sita	sitta ā shar	
17	íkumí na mūonza	ikūmi-na-mūgwanja			kumi na saba	saba't ā shar	
18	íkumí na nyanya	ikūmi-na-inyanya			kumi na nane	tamant ā shar	
19	íkumí na kenda	ikūmi-na-kenda			kumi na tisa	tisa'tashar	
20	míongo ilí	mírongo írí	abiri	abiri	ishirini	ishr í n	tikitam
30	míongo itatū	mírongo itatu	asatu	asatu	thelathini	talā tñ n	tomouni
40	míongo ínya	mírongo ina	ana	ana	arobaini	arba'aí n	artam
50	míongo ítano	mírongo itano	ataano	atanu	hamsini	khamśí n	tomonimiet
60	míongo thanthātū	mírongo itandatu	nkaaga	nkaaga	sitini	sitt í n	naomon ile
70	míongo mūonza	mírongo mugwanja	nsanvu	nsanvu	sabini	sa'bí n	tomon napishana
80	míongo nyanya	mírongo inana	kinaana	kinana	themanini	tamā nín	tomon isiet
90	míongo kenda	mírongo kenda	kyenda	kyenda	tisini	tis'í n	tomon naudo
100	íana yímwe	mírongo rímwe	kikumi	kukumi	mia	miyya	ip

日 本

数に寄せる心

大 橋 和 華

世界には種々の数に対する捉え方があるという。「一つ」と「沢山(複数)」という捉え方や「一つ、二つ」までは数えて、後は「沢山」の中に含まれてしまうなどと言うのも聞いたことがある。日本にも、そんな時代が遠い過去にはあったかもしれないが、文献に残る時代の日本の数の概念は十進法であった。基準になる数は「ひ、ふ、み、よ、い、む、な、や、こ、と」の「十」であった。これは一音節より間違いの少ない二音節でという日本人の智恵で「ひい、ふう、みい、よう、いつ、むう、なな(なあ)、やあ、ここ(こう)、とう」という二音節型になったり、接尾辞“つ”を伴って「ひとつ、ふたつ、みつつ…」などとバリエーションを広げていったが、基本は「ひ、ふ、み、よ…と」であった。十以上の数も記紀の時代から「五百つ真榊」とか「千代を経る」とかいった調子で、知識人は数えていたが、一般人にとっては「十あまり二つ(十二)」という表現から見ても、せいぜい「十」までの世界であったと思われる。

漢字の移入と共に「一、二、三…」という数え方が入って来ると、「二、四、六、八、十」といった二つとびの早数えや「一、十、百、千、万…」といった位取り数えのような立派な数え方も即座に修得し、古来の数え方と併行して、日本人の数の世界は広がっていったようである。

さて、子供の遊びは大人の生活の反映とか。どこかで大人の数え方の世界との接点があるかもしれない童歌・昔話・民俗について述べてみよう。

今では「♪大黒様と言う人は、一に俵を踏まえて、二でにっこり笑って……末繁昌末繁昌」の祝儀歌くらいしか思いつかない大人の世界の数え歌であるが、子供の遊びの世界には沢山残っている。「♪いちじく、にんじん、

さんしょにしたいけ…」,「♪一番始めは一の宮,二また日光東照宮…」と
いった『語呂合わせ型』,日本の仮名が音節文字であることを利用し,そ
の長さに数の意識を持たせた『モーラ合わせ型』

♪だるまさんが ころんだ (十。)

♪ぼんさんが へえこいた (十。)

などである。その延長上に

♪チュウチュウたこかいな (十。二つとび。)

などがあり,これらは昭和二十年代くらいまでの子供のものかと思ってい
たが,現代に生きている歌もあることを知って驚いた。特に

♪インデアンの ふんどし (十。)

は戦後生まれの数え方らしい。現代の三十代から二十代の大人,勿論,大
学生からも聞ける。こうした数とり歌はどこから,どうして生まれたのだ
ろうか。私がこの頃考えている課題の一つである。

最後に,最近採集した昔話の中から,数にこだわる日本人の心を見てみ
る。私たちが数に寄せる想いは二つあるのではないだろうか。一つは序数
詞としての数。正月二日の初夢は「一富士,二鷹,三^{なすび}茄子」,鷹や茄子よ
りも,出来たら一番の「富士山の夢」を見たいのである。二つ目は数を量
と見る見方である。数の多いことは量の多いことにつながり,量の多いこ
とは豊富で幸せにつながるという考え方である。

1995年8月2日,岐阜県大野郡朝日村西洞の新井おばあちゃん(83才)
に聞いた『屋号』という笑い話を紹介する。

ここ(朝日村)には屋号があるんですわねえ。一から十まで数え
ますとねえ,

いちべえ にしがいと さいも しんねも ごんだい ろくべえ
ひちえもん はんべえ くらべえ じゅうじろう

と,あったんですわ。そうしたら,その一番はじめの一兵衛という
かた
方が

「みんなは、ええなあ。」

って。中ほどから、はい二番からして、ずっと上へあがっていつとる。

「俺ばっか、なんで一に居るんだ。」

って。それが悲しいって言ったら、十次郎が、

「一兵衛、泣くなよ。半兵衛もあるに。」

って言ったって。

採集に行った仲間と、ドッと笑いころげ、おばあちゃんの明るい笑顔を見ながらも、ホロッとしたのは私だけだったろうか。物が多すぎて始末に困ることも多くなった昨今、人間の欲はどんな経緯をたどるのだろう。これからは、多少は違った「数に対する想い」があらわれてくるだろうか。

ド イ ツ

2時半は「半分3時」

佐 藤 方 代

ドイツ語の授業で、数の数え方は、とくに聞き取りが難しい。ドイツ語では、二桁の数字はすべて一の位を先に読みそれから十の位を読む。13から19までは英語と同じ方式であるが、21は「アインウントツヴァンツィヒ（1と20）」、95は「フュンフウントノインツィヒ（5と90）」となる。13から19については、英語で慣れていることもあって、たとえば13は3（ドライ）と10（ツェーン）に分けて考えず13＝ドライツェーンと読み、また聞いても抵抗なく13の数字が浮かぶ。ところが21以上になると、たとえば23を「ドライ（3）・ウント（と）・ツヴァンツィヒ（20）」のように3からはじめるのは、目に入ってくる数字を読む前にその順序を逆にしなけ

ればならない。「どうしてこんな順序で読むのでしょうか？」とつい恨めしげな質問がしたくなる。それでも数を読む練習は、数字を思い浮べつつ並べ替えてなんとかこなせるようになり、そうなるとかえって「二桁の数字は順序を逆に数える」という意外さが刺激になるのか、学生たちは数字の読み方を他の項目に比べてよくおぼえているように思われる。しかし聞き取りの練習となると、聞こえた数をあわてて頭の中で並べ替えようとして頭の中がひっくり返されるような気分におそわれるばかりで、出てきた数字を正しく聞き取ることに慣れるにはかなり時間がかかる。

ドイツ語の時刻の数え方のうち、たとえば2時半のことをハルブドライ（半分3時）というのも、日本語と逆さまで、慣れないうちはずいぶん奇妙に感じられる。半分だけ3時という意味だと説明をつけられても、「半分」と「3時」があれば、日本語の「3時半」や英語の「half past three」とつながってしまって、はじめのうちはとっさに「2時半」は浮かんでこない。ハルブドライと言われると「ドライ＝3」の音に誘導されて3時半を感じとってしまう。

時刻のとなえ方のこうした違いは、日本語を話すドイツ人にとっても混乱のもととなることがあるようだ。あるとき、日本語をととても流暢に話すドイツ人としばらくの間おしゃべりをし、別れ際に1週間後の2時半にもう一度会う約束をした。ところが、前日になって「明日は、2時半に会う約束だったか、それとも3時半だったかしら？」と確かめる電話がかかってきた。そして「あのとき日本語で話していたかドイツ語だったか忘れたので、わからなくなって」と言うのである。たぶん「3/drei」と「半/halb」というバイリンガルの形で約束の時間をおぼえていたのだろう。ところが「3時半」だったのか「halbdrei」だったのかによって1時間の開きができてしまう。「x時半」に約束をすると、ときどき混乱するとのことである。ドイツ語を話していたのか日本語を話していたのか、あとでわからなくなるというのは、よほど自然に日本語が話せるのであろう。そうすると日本

人なみの間違いも起きてしまうというわけである。